芭蕉其角 二翁正傳 上

へ 5
728
1

東都　伊賀産藩士
泊船居　竹二坊著

芭蕉翁正傳

伊賀　藤堂青吟大人跋

伊 へ 5
門 號 728
巻 1

芭蕉翁正傳

序

いにしへより俳諧のおこりは所や和漢一
条にして宗祇の九星を開きたまひし
これは俳諧をもてなくさみてよろこひあへるは
武山の翁しなおまして昔時天の俳
をしるおひとく陽の光をし二句一言を
の草言をあらはし[illegible]のみちを素義鳴
りてましをさすへ[illegible]はつく[illegible]まして

連てなとりかけ武のみちし甲斐の国何折
のみちをしるし治め給ふ治の道をもしるし給ふ
こゝろや詠諧のつらねられて我子哉
の情をも残の道を窮て書をつくる取
けるまゝ人の心をつくしいましにれは
中にもちれく様々なるものゝもむね
てそれくらしられにあまた役らしく謡を
甚きよふを好し謡にてまた御画をえらし
これをなれ種々ちをみれしかまた随翁れ

画くなく様の画れるしくく論ありて言うく
ものとさるくらしてとらくし此道は勧善
懲悪の意ありてこの下の所を明らかにして
才子此をも修の事をくらはもいろくさ
はるかなるを貴山高人をもまなの風を
かうて和なるは此れを流れにからまする人
しや此ぞれ者の心ちに従ひ文様文鑑
又古今の名のかれ新の作者にたし
及その中にも十論名弁を作譜の論語

よ称しそれなどの教訓やらん句論
着の奥旨をさとく叶たるかくて今これ
くこえ況を作くれれは離俳のき派て
文章を論しても老らしく余中らえ
ゐるしかく桃子の古人にも俳口授ゐるを
皆すおる俳人云翁これを琴すれ
る俳人五十年前の俳諧ゆへあって此俳
俳くおれしかるは此るを空えて一陽れ
伝爾しらさしし事着の三年百を余、

年の俳せしそをいふくゝ天の
鈿女のむしをそむゆるしひ此蕉門残
影さんを俳を作ひられてやうて求之此
信をおとし斬もやや一風の名のさまを此
門おのく遥くうつて逆てみると蛛黙く
まろの語りを俳士真信を衛の門ちの
名優女をさへて東陵の某丘をそまよう
をうしまわて花笑てあれいよとて称落此
まさにこそわらさく路くるを玉女の降名を

きハめし是皆をもれいてよろしく
志賀の月を照してそとわされハ芭蕉
と弁やんなるねんそこの家おそなるもや
ふやうなまるを規矩となして五言
いう六律を叙そとしやいくそく露睨を
秋れをうろあつれて道て素元の車を還
しく若を学んともされハ遠くに山里の
外を捜さんとるもはとして西行の円を慕
ひりやるの吾ふして伊賀の風格

懐台の人として蕉翁の何来に住よこれ俳道
よって蕉翁を祖としてもとて伊賀の文風を
承ちて此正説を紀としてこゝろを吟
のすうして始を連ら歌の法式をまひ俳を
東武の伊々かえして俳頂往下に
加ふるに一統の系をなしてしるての変化
とく蕉翁にそて其の実を得れたり中
古の都風を删改して西風の一路と為
をし斗此俳を捧げあし四方の君子に

ゑらゝるんしきれしを傳えへ来神秘
なれハ法をたゝとるの扉を堅くとざ閉
のみなりしをあけてけふ冊となしてうり
けるをたゞ人の信あらんことを自他に論
なく法を傳へ又他に施すの是傳なれ
ば専ら是をもとひきを磨くに怠らは
名のすゑなんとし武陽の沼永居士
しるく台下此家の分名刀ゆるしを
もらふ

ちる桜はらや すゝきもひらく
弥九郎書
沼永居
作二坊
寛政十年の初秋

正傳目録

一 文臺錺様之事
一 執筆作式之事
一 眼ニ五段之伝
一 仁義礼智信ノ伝
一 千句万句作式ノ事
一 夢想発之伝
一 高間之伝
一 月の定ノ事

一 正花之伝　右九ヶ条巻書伝の書ニ
一 新の図　作法六ヶ条有之
一 未無　路字略ス右
一 名残留　路 異極
一 十二ヶ条　以下之伝書前其春へ伝之其 路略ス伝江西又ゟ中ゟ伝ゟ中至
一 二十五ヶ条　平ニ伝ス
一 姿情の伝
右者我家の秘書也

蕉翁温故

それ芭蕉翁桃青は伊賀の国阿拝の郡柘植郷の人にして俗名松尾甚七といふ後あらためて松尾忠右衛門宗房と号正保元甲申のとしの生れにして泳平無情宗清か苗裔なりといへり宗房と名く父此名を儀左衛門母を孫列か和泉の産なり桃地氏の娘なりし支考か翁の碑銘に曰吾翁は伊賀の国に生れてこれは桃地の産也と

あるは此氏を松尾なりしを知りて書てむも母の氏をもてあやまりしものか

泳平無情に従ひ屋浦の孫八といふを養子大方れ石のやうなる行を人皆これを名物とす顔は同人にて嫁ぎもしけり柘植氏松尾氏福地氏は兄なりし後これ嫡子なれは上野赤坂町にて孫兵衛と号し家業をそ次男半右衛門と号し長基の後をつぎ之男忠右衛門としる寛文二壬寅のとし若年

新七郎良精のほとりそれより嫡子主計
良忠に仕ひ良忠の何かし宗房を呼れて
月花を翫ひかつてらん 良忠俳名蝉吟といふ 人事
吟の門にして宗房しるはの差ありき
に及ひにしもねりをを一とせ大坂の役に戦
死せし其後新七郎良勝 初名良文 主計の遺
志を遂て
大坂やえんの和表の五十年 蝉吟
又あはれ

此くりえ孝の本をしのふく 今
けふ册あふ孝その後の猪苗を家律の
義仲ちなみ帰らんと清くさく森の房寺をはね
仰へよりてことろとそおも蝉吟寛文
六年しかし四月不易にして世とさり蝉し
ふへ宗房聞て傷悼しくらしと月すへ
まと蝉吟のをしみをして高野山報恩院に
帰むけおく報恩院のゐとふ 帷子を松尾右
ありつかしにして今に祈るされしくまそ下

山とれあらしきるくに道世の志ありしや
頻に鳴とくるていとゝもゆかしく侍れ
ことに年 秋七月何くれと家を離近
き此隅田清之家の間像はなれと
在るれは宅にて包ある青柳ありて
これに
さしたるに川おもやなのしるし 秘
また書家の宗房室此を養老新
七郎中屋備前書画良雅の后兄まれ

寛文行侍りて孫なりし之今何某行葉侍
正宗房何も之此経冊何公の家桜花
正保の此比加藤根の后四十文五郎
在何公の家を継ありて多くの此等
あらしるれより後より東此を堪
をけれ東山の梅に侍る
信永まし号を 寛文十二年壬子九月
東武杉風あくれ石川を植し助を
許しけれ蕉翁しれ庵を示これ
深川に庵を許されて人事に一株を植く

然るに廿八世芭蕉翁より正宝の宗匠
辰の三月吉日をもつて俳諧をひろめ同秋東
武に下りし貞享四丁卯の秋十一年を過て
如くに俳諧をさかんにしたまひて三大壹
年目 隠居して卯年にて 俳諧なり 又探丸子 隠居の子 婿子なり
棲となりての俳しありて伝れしむかしの跡しされ
ける

さまざまの事思ひ出す桜かな　桃青
春の日はやく筆に暮行　探丸子

所年譜あり 公は新七郎良精の家に仕へ
三代目 和若を名のり 鄙して元禄のころ東
武に下りて 公ね奥羽を漂泊して
同七年戌の夏 伊賀の故郷にて七世翁
其後 猿雛 蕉翁 半残 土芳
宗を継ぎて五代目 俳諧ありて九月八
日ようやく 唯然坊を伴ひ 難波
に行き 難波にて九月中旬
府の宗匠 御堂前にたち寄りて

五十一歳と名のりして岩下のあるじを
まう水をなりても
一行庵とて許く俳諧ありし高花坐
三名庵　其角庵　翁外庵
東林齋庵　西林齋庵　二林齋の庵号は蓑笠庵ゟ発せし其文庵を建
三名庵は八ら再興して再敗庵と号を
我友なる三名庵をなりて
翁の圖　木具　手行曲
此のハ八らしの消して行庵の名あらはれ未

急ぎ行の由は右の東よりゆく翁かれの此
後は京にて両翁を書しなるて
翁の像　花の保半のおもむきあるも
之まゐりて家は赤坂町ありし宝暦の志行
こ仕月まゐりて御庭にて家族をよく
ありくなり
一翁大阪より又まゐりては茶をすゝる北は袖を
なりてハち義仲寺に納むるを其の其年
書くハち再び故ある心して文後ろして至

時あり実にさもあるへき物なり
一 若井新七郎良聖上臣備の内に松あり人
芭蕉翁の松と呼ふ翁の筆を松れて今の
松も其種也
一 伊賀久見町山田屋市兵衛 他名云 と云者を
見に翁従者ありしく宝ふるふれしも
有る此種の事ありしに付翁
案しまやまうふ少しの枝の形 と云ふ
たれは曲るさ在りていへと松と云ふ 時

元禄之代月他名呉川今は高袖とあり
て呉川と寄せしとて
暑に待し傍らに濃やかにしまはる 宗房
付句芭蕉良忠家の秘伝布目経冊
なるも又続山井に其他ありてしりし
是に寄りたに為に翁に伊賀の家の家に
白馬の丹子侍と川て有を伊賀への
蝉と芭蕉家に仕て雅名を今に伝ふと云

俳名ハ宗房と云十九歳の時ハ宗房と名ぶ
二十六の年武の深川に庵を結ぶ芭
蕉庵と号しと云ニ芭蕉ありしより
伝曰正保元甲申としの生れにして寛文
壬寅のとし始て藤堂新七郎良精の臣
ことなり寛文指ありけれは翁十九日寄之遊ひ
仕へし頃その嗜なりしかれハ寛文四年
の秋ここ家を辞退しけれハ翁二十二
四歳ばかりよりして東の季吟に遊

学びて寛文壬子のとし深川に庵を結び
時翁廿九歳其後延宝四年辰のとし三月廿
日に始て俳諧をまなぶ同年秋江戸へ
くだりて後十二年を経て貞享子の卯
としめぐりて俳諧をもなしけれはしく
五歳居して大和吉野をめぐり郷して
え深川のさとより又江戸にかへりけり其翌年
え深川に年を経て源氏の二年元禄己巳
三月末芭蕉深川を出て奥羽に赴く

けふ奥州武隈の松を見て
松ハ二木を三月越シ　遅桜
そハ三月か年月のうしみをこそ宮まいりる
なりまする名にと武隈のうらゝ句とて其秀さ
あはれたてまつる深き泥るとくらし
あらため　武隈の松ハ月を二木をうやこく
いつしかりをこそ年とこそくん
けふハ名しら伝あるしもよしなれるる也
塩竃の明神をおかしまして和泉の三郎
寄進あるね燈か称ちのし為し文さまを

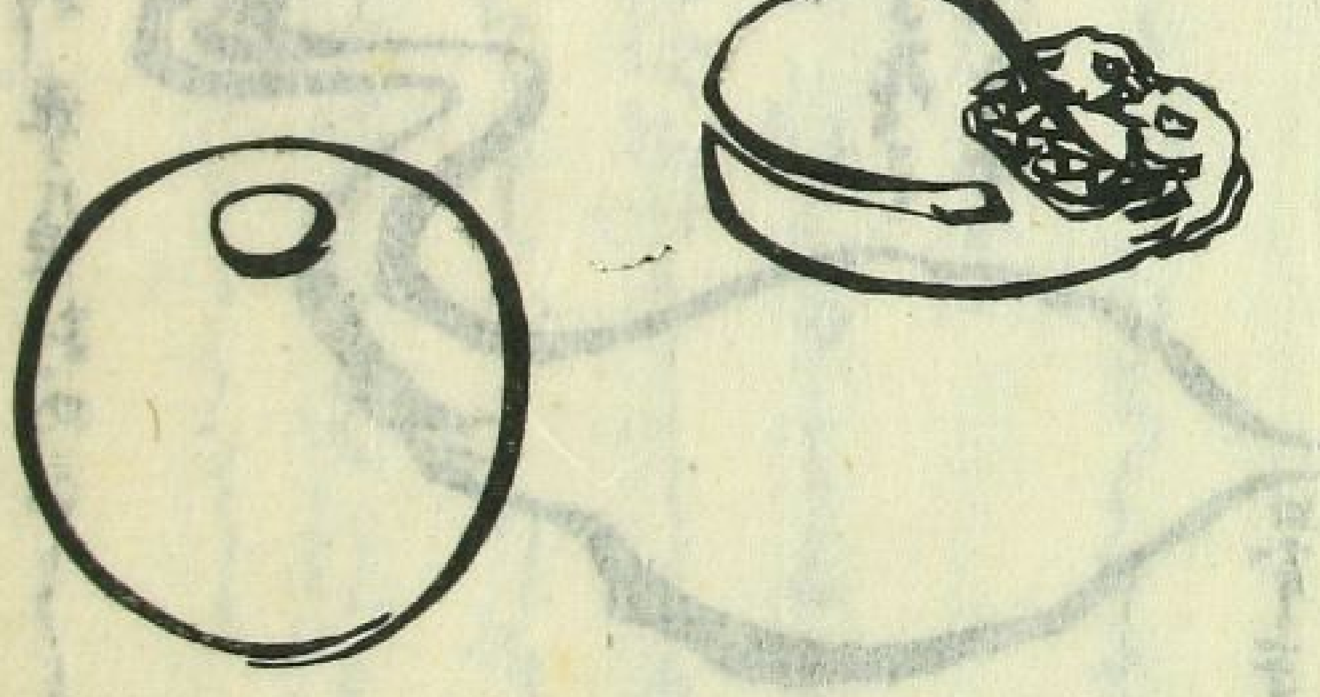
扨しる五月まいね宮山まゐて
寒風や不の三月北ね宮山　都まゝ
詠ミきみ湯をきめつきと被され　ゝ
中あめいふ所名あれて月の山　ゝ
けふ流をおし羽黒ゟ国吹田越掛
仏く深泥して加賀の国越おこさ
とり卿し伊勢の任てみる者こはく
路まゝやとし江戸くゝるね翌年寒又
旅籠あつて膳所ひとしくよみるを

集ぬ猿蓑集と名しけれハ瓢集も
出ね又石山の奥に菅沼曲翠子の伯父
侍しちりて庵あれし幻住庵と名つく
宮寺ありてしはらく住給ひ所々より杖を
むすひ又深くこもりて芭蕉村のわたりへおもむき
詠ハ猿蓑を撰ぶ続猿蓑集をなし
其後深川の芭蕉庵へ帰り秋又風雅をきはめ
更ぜすして深川にて深川にて游居
炭俵集又杉風子か家の集をなし

侍しかとも又これよりさき深川を出て兎角を
詠ハ大津より伊賀に出て伯父此は
去り唯行をともなひ京にいたり難波に至り既に
とつきは新に而して病の床に伏し
元禄七甲戌のとし十月十二日一夜の夢
ともなりて終に是より去り其の翁の説を
生寒をまとひさら家の理をなしとし故に
室を補ひてとこゝに

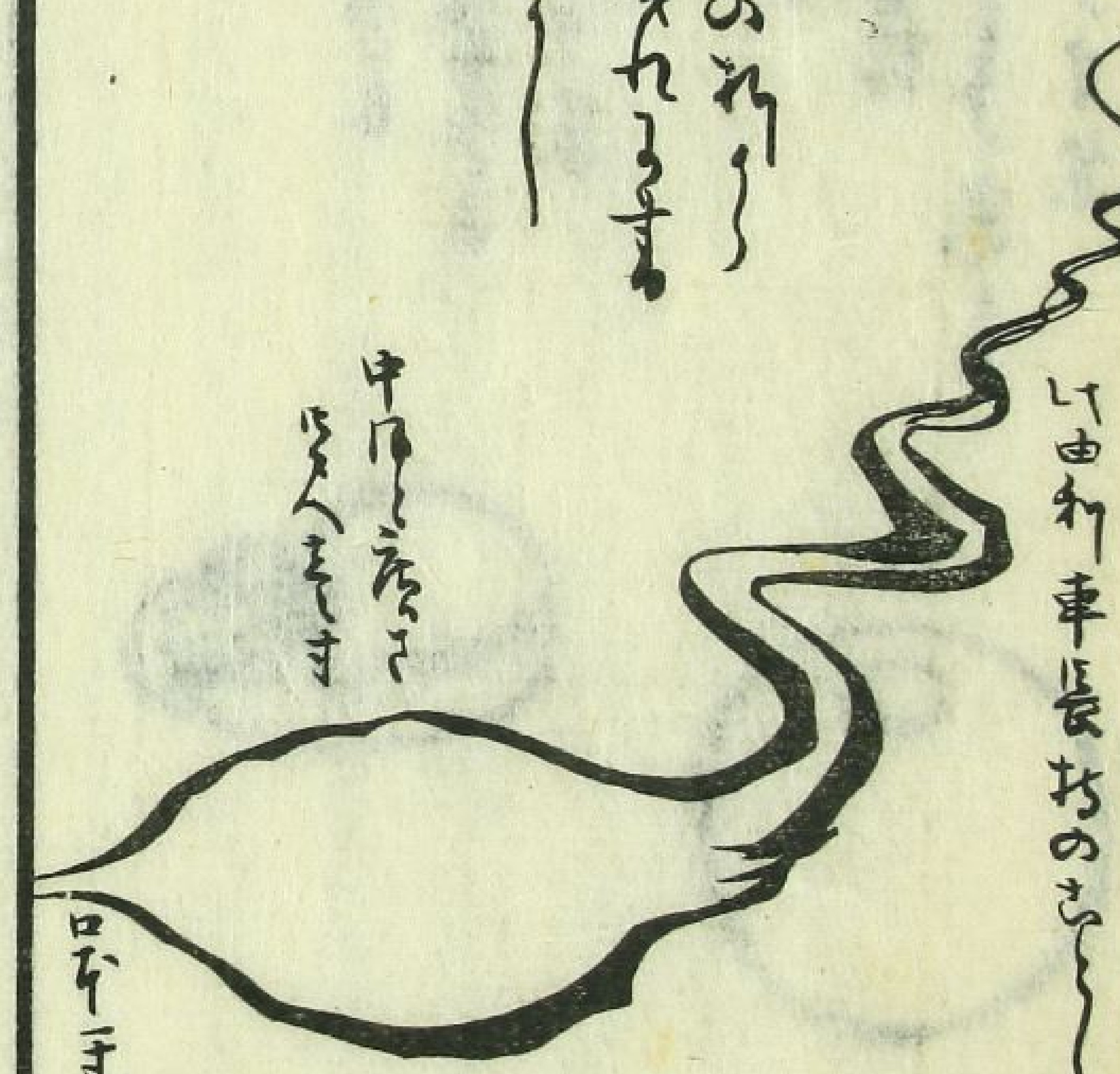
本邑
洛宇治ゝ古
柳本地窯を
擬拵一寸余

もら籍
洛雲亭極
陶器なとを
ワタリ寸余



鯰の圖

万葉丸
多く床の形りの
背に鰭れある
なし



執筆之傳

一文臺ハ床の真中へ前て床前ちかく置也
おしえ人よりて置くなり
一文臺の上ニ硯の蓋ニ置て懐紙二置きあり
を置きおくへし懐紙横折りにして二つ折
二枚懐紙四枚なりとも折りて
四枚一つ折にもなし用にて文臺に置へ
し
但し硯箱の中に入て筆一對まゐらすべし

以懐紙之事

一平懐紙ハ織目懐帋として折てかくべし
の端書なとハそれとなき書添一折也
但平懐帋ハ略之礼儀なしの端まで他諸の連歌などにハ
大概の事にて貞享式ハ此書にも用ゆなり

執筆之礼

但俗人ハ許なり略して禮ヲアリと執筆仕候事
飲食停止之事

一執筆勝手よりいでて連衆に会釈して
文台より少し隔て座の前にすゝみ
よりて文台の右の方により座し
をし其の座にて文台を引寄せるなり

一文台に向ひて右の手にて右の方
へおしやる時ハ座してやうやう
と文台のうへの方へおしやりて
さて右の手おしやるハ又但し文台を
ひきよせて左を持ちて懐紙をとりて
文台の中よりまづ折をひろげて
二枚ひらきて上の方を左の手にて
ゆるの事のうへ座して又折二枚をひろげ
まづ折の懐紙をひらきて文台の上に置なり

筆とる手形とおほせて神代の事より袖を
示の手におきて書くし由して書きとめし
墨を合せて書き記すに其付ける事の作法
とさてなりの其事情心のまゝにおほよそにて
書なし候て文章のことをおほやう
記す体の字書て文章を認め宗匠の事と
同じく宗匠の事書きを成されし体様の
の名を云て又何の事をも書きしをもて仕置を
筆あらそひて法式なりて記す文句と云て

一切紙に何事を認むる事とて用ひ侍る
句又文章を書きて一帖に二の紙を一紙に作る事
発句の事ども此記されて再び書く一切紙にて
此事もなし給ひ月並に二句ある月並く
記すべしとして連歌・宗匠をもとめて定め
表は来て並べ記して記の句もあまた記す人
あれば又懐紙書きとめて書く文章を其書く
書きとめて記すに二ツ表の句を付る内の紙
を一寸ほどに小口を切りて一枚のつゝみの

紬屑を入内の紙よりむしりまるて鞠と
なし文庫の表紙の方へおくる紙のとよ
よへ糸を通しておくへし又耳折右の通
これ迄は作業にかゝる事かへ右の
ようにしたくの糊をつけ付るのとして
迄さん紙の表とよるなしおきしし発る一
寸ばかり作業とよむ差込孔を明て
一寸幅はなしの作業とよむ句をそなへ
これをもつて情趣は文章の句へ至く

揚句に四篇以て作者とよむ次に姓のごとく
なしの糊をおきて人となれ詞の表に示
なる時これありて文章終姓のごとく
作者事織成るるしあり未付にて情趣ある終
揃ひてとじあはせて錐をさし中央
一寸をとるなりいとこなた下なる天
地をとるの糊十分よろしく四分なれ此
方を一分切てあまりて九分なりとする
まりの糊とじる丈を切てきりをとしい

袖、つれなし

一 懐紙ハ折墨 ちこと 紫花く

一 書様ハ古のしきしのやうにかくへし

一 四民も連歌を詠して百韻の式く

一 宗匠の居ル文臺の前之執筆ハ右に

しかるへし

一 発句を書して口上 口伝く

右ハ執筆の作法ハ何も宗匠を

口伝くあつかふへし

発句心得之事

几俳諧とと上下取合て百一首となり是を記

とくに虚空深く向て発句の中に案句を

記して後に其句を発句とも云ひ一句新に生

對して生る句を眼と云ふ路の一句を定く

其一句を定て句ハ新に取る句も発句とも

端之眼を作る事ハ天地より人を生

るゝとくし人を天地より備ありとしたる

天地より物の初をふとふしなるを是哉

執しこそ八分となり一分くさきうち流の字
の文字ちからなくしてよはき事ありて山あり
川ありみちて里ありて一筋とも筆を
付加て発句とせんと云りき絶句の中一
肝要なり図て長き秋のもの気おとる
一ふところし発句の文字甚しおもて一筋とも
配されば名案工夫を尽くし平句にも
猶る句作大切にとるはるなる切字ちらしの大
なあるらむるこそ肖するあて気和り

やしきあれ次第にてきこにいかんしなれば作
語の序とも始まりて渾沌未分の場まし
おの作者して発句をもれば此の作例あ
らわるるはしとく大極より出たる発句
にあやまるさまたるを知るべし

脇法式の事

一 脇に五品の法あるときしるあり
相對附 遠附 順附 違附 添附
くさすしも要の品のるくとといふこときえい

大躰はかくのことくなるへし

抱句　いろ／＼の名にわかれし其の字　抱積

わかれて詠の義を覚ゆへし　義

は句を始て他流の趣味を学ぶ人の眼目

第一義として師の口訣を覚ゆへきと云

而一様と覚へあらくて詠の義を立るへし

ことに而一句相對して眼の付所全く違ひ

切字は眼をてよぢの道なれとこゝろも

口伝を発句留徒眼をきこえなく候

角眼は発句の季感を面白く家によ

付句ふへし是肝要なり

中之之支

一方ニ付て只宗へかれし　此眼の付所

よくして当るそれ／＼に限らして打越の如

而ちて是発句同じそれ／＼付くるに付くる

より是れは此方の当と宗くら其そけ

ろく／＼たのもしき詠句之旅口伝あり

老子経曰一ハ生二二ハ生三三ハ即帰一　十論曰三即一云

此ごとく得て知るべし
雑句 何も其年の暮春夏冬にて
何も其年の内の格子定りて
此句之内句々てしとしるし次季の句の事
下りまでとてるべし
何も其年の暮春夏冬合にて
何も其年の内の格子之紙切て
これ今川も前にて第三とちがへし前と
前なるは次第てしく考知るべし此外
大かたの句 又發句の定るまで前の句

あらましを知るべし
四句目之事
一四句目ハ發句脇の句よりて大切なる
場にて第三を抱て句目付安様にして軽く
なるべき所なるしかれども前句の付やう此所
よろしかるべし前にて付かうをしるす
付より 五句目六句目七句目八句目と云う
格別なるは略し
二五 二三四 二五二 四二之

短の句とは格ありてうたひをつくる七を小く留る
又は拍子は一巻を済まする事あるべし
此句 かひなの小く嘯をかなし
山彦も添ぬかし 嘆く 紫

「二五「二四

ところゆきを影し長嘯
逸人のかたぶけ身の 紫

おもしろきは東行南行にとゞめずして
書こゝろに書くもまことに作すべからし

其体に住立るしてゝ四句を定る
四を延して定むるし 二五と五二とに
この句も書わきまへるれ 紫

「五の此句

あさしは板の男の書くかれて

、

金銀用も我がなく字取親しく
暇ゆく宝の山に入るべし

此二書はあらゆる五の詞おもくして句を述作

なるもあるべき意ある所は句と意の字を
落すべし一句深く意あればこれ一句の仕
立大切なる事を知るべし

〽婚礼のかく

若のむすびまでおさまるなれ枝

かれば文字の中へ体字を入て切字をき

縁よせまるべし 口伝

〽奉納之句の事

ん神仏とててまの祭句を詠句にて仕

あるべしとて日々運歩のたりに書なれ
次の下にならびなお秘伝の文五言あるをと
ともなるべし

発句 嗅花や旅の東味をさぐる神の杜

かけ五言まりとも候べし

〽脇句 詠句の事

脇句は句の言葉ことなしとなし発句の附合
あるべしとまるべきなれ

発句 地をくるまは天へあられ哉

ちるを見棄つる夕燈かな

又

橋の枝ともし火とかれ
大氣なりし里にありけりて
詠句は哀句の姿をかくしていふべきなど
傳ふるとぞ

膝をるや露かを挟くしろゝ
讃句
いつも灑香を打て買める
「追善の句心得の事　又

一追善を祝儀に作るべし　祝儀を追善
悼を詠むを他人に示すことを肝要とすと云
七表の功を云ひとりもべし
讃句祝りや孫寿や子孫栄て

、

悼はんまんちやうかくて業のきも
すべて哀句を七表の功と云祝句と称ふる人あり
哀歌と云て用ふべくいはきゝるべし二句は
かくとくは句餘一巻の於そも大切の事口傳

季寄雑句、照あるの文

証句
人里をたえてこえてや鶯哉
としのうちに五十日
竹橋を渡す背肉のあら　口伝

同じ季なし傳

実
季なしで花より落しの中

風姿
の中乗しまいあって落ちましの中

重
季ありてやしまいきしの中

右雑中の法　考ふべし

一　掛てにもの文
是ハてにをはの詞の節句のひとつ
語て結ぶる

証句
見るからに袖も濡るらん花の露
落る家の香にもる

伝かる形を立てて残りし此
夏の下涼しみ人をいれあって

一　並てにもの文

さもてさもなき前句の躰を附句の作にて至て
附句
おんなしもおもふ杜の夕くれし比
雲ちる比久秘の山此所やしるも
、
光くも出す神の宝前
とあしも伸さしたる御手は
〽かれてさもの支文
かれてさもなき前句の作の訳を前る乃
比ゑ清て訳ぁ流てぬ心あへたる附し付を見ゑ

桐のはよりまれにもみく宿のむ
附句
さらのものやらやむさ
〽あらてさもの支文
前りてさもなき前句のけやりき付まて前の
てけれたるし
又くふきれ宿の灯火
附句
古今集深さ後撰く柔深て
〽附合作肉胃し侍
跋
さまさいふ成おもまさ乳書

お膳といふはくつろぎたる旅宿にて

肉　鳥獣の肉を詠る句は凡経

あれなき詠の句もつくつく

背　かくもくしかうのはてて霊

山椒しこそうを入て搗こ所

汁ハ作意に直すすりを又も発句より

前切　胴切といふ事も口傳句法をつくる詞

なるをさらにいふよしあれ發句にもきまる

又前にてもよろしく行たるべし

有文無文之句作之事

詠めて月を雁や有しの袖

是有文也無文の句作をとしてあむをとる

月を詠めて雁や有しの袖

是無文之句也有文を奉るべし一

句の内にも勝負を付べし

「こ」しの傳

こしもるゝ「残暑」未　けしき

涼しき「とし」「何」しなると　残暑のよ

「あくし」なるかなし「あらし」「あらかし」
なるも未来のしるしけ二つうては切字と
なるなり「あらもし」「ある」「なるらし」
なくくるのしなれは切字になるなり

発句

名月や月は実内しかの影

あの世ちる花見しは實の志家の芽き

右句は現在にして往くあの世ちる花見はしよの
事なりは未来に見るなるへし

「画讃の事

画讃とて世の人おほくは画の事をとれとも
それは画の讃歌にして一貫なし讃といふは其画
の姿をよく〳〵て其を心得しむあれは
終しあはれて深くて近くしく姿を
いうは事は其一なるし花月画の心をあらは
梅見一しくをなとも梅の毎の句の讃やある
るまて〻に和し口伝

「新情
情をてあるに転しなられて

妙なりと云ひしはまことなるかな
そも難きの字を公に作りてうるさまに
詠情をしあらはすも

右者古人の附例にあげて世よりよろこび
のちに用ひられたる此外にも作例あるを
いふにもまた歌をよみし人ならは何んとも
文人は其の語を聞して後々尤も
よろしきものおかしき問のなきも

ならんと古人の名言にも知るなし

文通

おくれ者も詠みすてるや其の凡　木二

遠し

其の香もおくれしも此の両の歩く哉　青岑

此俳書を言ふまでもなくして此冊のかぎりとなせり

跋

東武の書こめし義正傳を飛さんと
くわすての志ほのなりて一書となりん
なりとの宮て古今年の久しふ至
里の御国まてかくるもの正説を窮
免かく千載の後まて残んとこそ
るくまれその大功なりねんこれを
古疑を乱さんと見ゆ家々に傳きよ
依ふのことの哉そこむ其の長功らん

まされのあら寒し関隠をされて萬歳
あるしことさて出来ぬるとそれ
たるまし

藤本ちまち吟
言